

特32

987

函架號	大日本教育會書館		東 介
	第	三	
	二	九	
	冊	架	函

毫本

西洋風俗兒女心得草

027346-000-6

特32-987

西洋風俗兒女心得草

天野 御民/述

M8 .

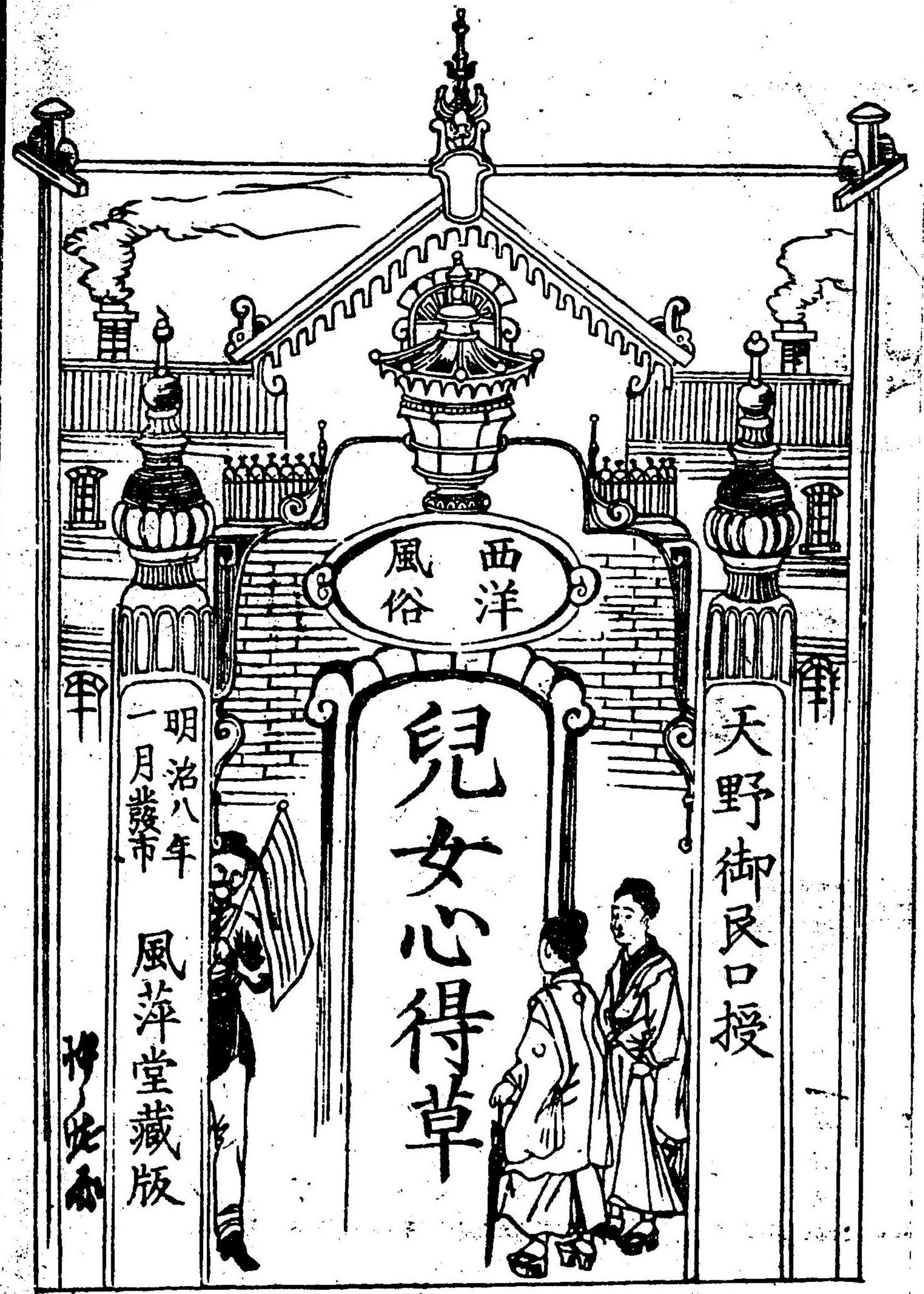
ADJ-0101



特 32三
987

西洋風俗兒女心得草序

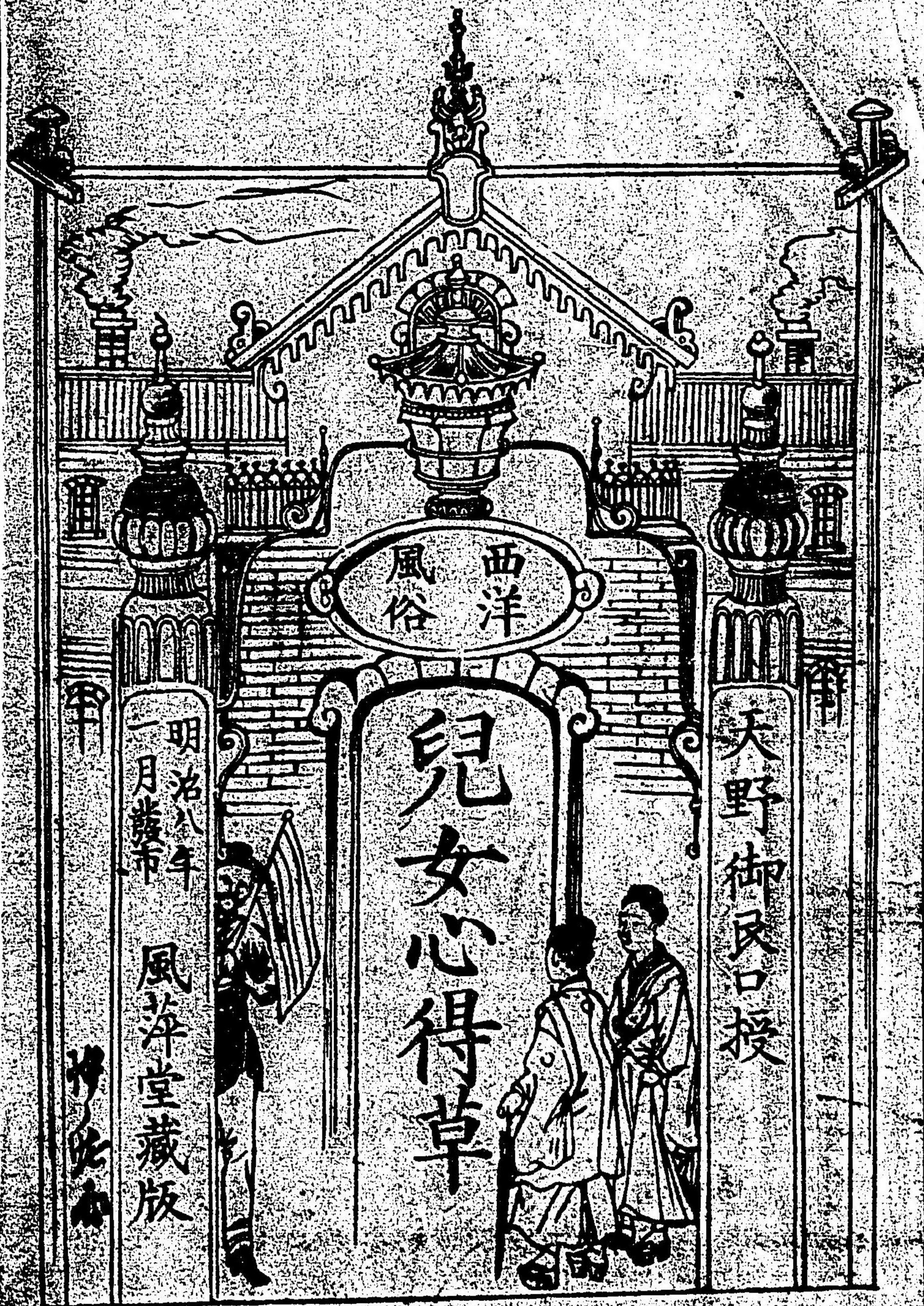
兒童婦女諸輩西洋諸食物之入ハパン
等其ノ思ハトモパンニ其食物中の一ツヲ食
ルニ其知ク此類甚多シ因之其惑張
解ノ人爲兒五洋ルモウ目ク飲之食ハ其
事我知兒總人其勤カ常事ノ大略セ
摘メ家人ニ示シテ聞クモ友人高田生
之ヲ著ル一以テ其者年一備ハモ其知



序

西洋風俗兒女心得草序

兒童婦女諸輩西洋諸食物少少之入ハパン
少少ハ思へとも「パン」之食物中の一ツを
あつたが如く此類甚多し因之其惑
解らん為免五洋亦多う目之飲之食ハ
事致始免總之人 諸勤む家常事の大略を
摘み家人等も不語し聞しむ友人高田生
之を著し以て其者年備へむ志を



清ふ予依り其由我書し序と名を以て
兒女輩終る讀む他人の笑を招くこと
勿れと云爾

明治六年五月

風流堂主人天野御民識

西洋 兒女心得草

天野御民口授

西洋マキチヨウにてハ毎朝マキチヨウ夜明ヨアケれハ蓑衣サヤキの俵上トウハシ靴クツをき
便所ベンシヨへ行く事コトにて前夜ゼンヤにても此時コトトキにてても靴クツを
部屋ヘヤの入口イログチに出イ置カかすなり左サすれハ彼の
ボイ小遣コトの毎朝トリ取トリて墨スミを塗ヌり磨ヌカて持モ來キるな
り夫ツより直スくに其隣トナリに設アる浴室ユドに至イりて水浴スイヨク
も尤冬分トモまたハ水ミヅを好コぬ者ハ別段ベツタンに湯ユを申付マウケ
る也浴室ユドハ煮ニてホテルホテルの宿屋シュクヤより備ソナへ置クシ
ヤボンヤボンあり是コトにて惣身ソウミを洗ソふなり

日本の習ていよて日の入は入湯をるとは大
相違せり成程日暮れハ寐は就く故へ身射
ハ汚るゝとも妨なゝ夜明けよりハ其日々の
事取かゝり人よも應對をれハ清淨に爲へ
き筈なり

儲毎日のことを言はんハホテルの様子を知
らされも分らぬこと多し依て先づ其概略より
申さん凡て西洋に航して着すれハホテルに行
き入口の脇は帳面場あり夫れは居る番頭は應
接し宿を借らんと言を番頭直ぐにボーイを以

てられられの部屋は案内せむ同行幾人あり
ても一人は一部屋宛借すなりホテルハ大中
ありて大は部屋數五六百もあり小なりは
とも百四五十に下らもして部屋毎の入口は番
号を記せり是を能く覺へ置くへ又其部屋毎
は附屬をる鑰二つを貸し渡も一ハ入口の鑰にて
今一つは算笥の鑰なり外出なとをる時ハ必らも
算笥を入口の錠を卸しホーイの所は預置くな
り

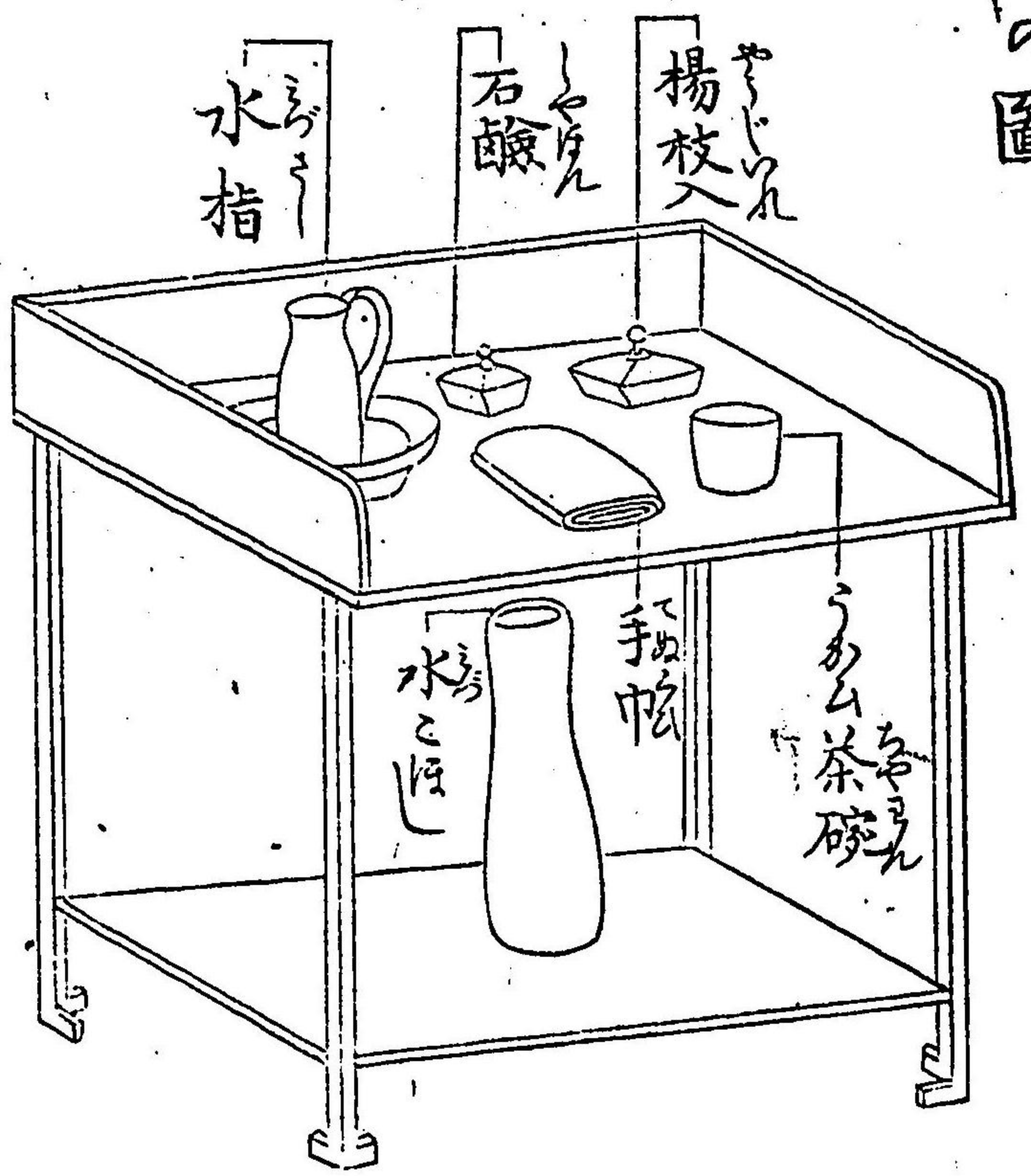
ホテルは二階三階よりして五六階もあり一樓

毎二部屋敷五十も百もありホーイの席も一樓
毎二一ッ宛あり是を支那よて鐘仔房といふ爰よ
ホーイ十人も二十人も部屋敷三應一て集り居
て其席の天井の鴨居よ部屋敷の番号を書き其
脇よ折釘あり是よ右の預置く鑰をかけ歸れハ
ホーイそれを返し呉るこれよて部屋を明けて
入るなり部屋ハ大概十五六疊敷斗りや十疊敷
をかりの二間あり

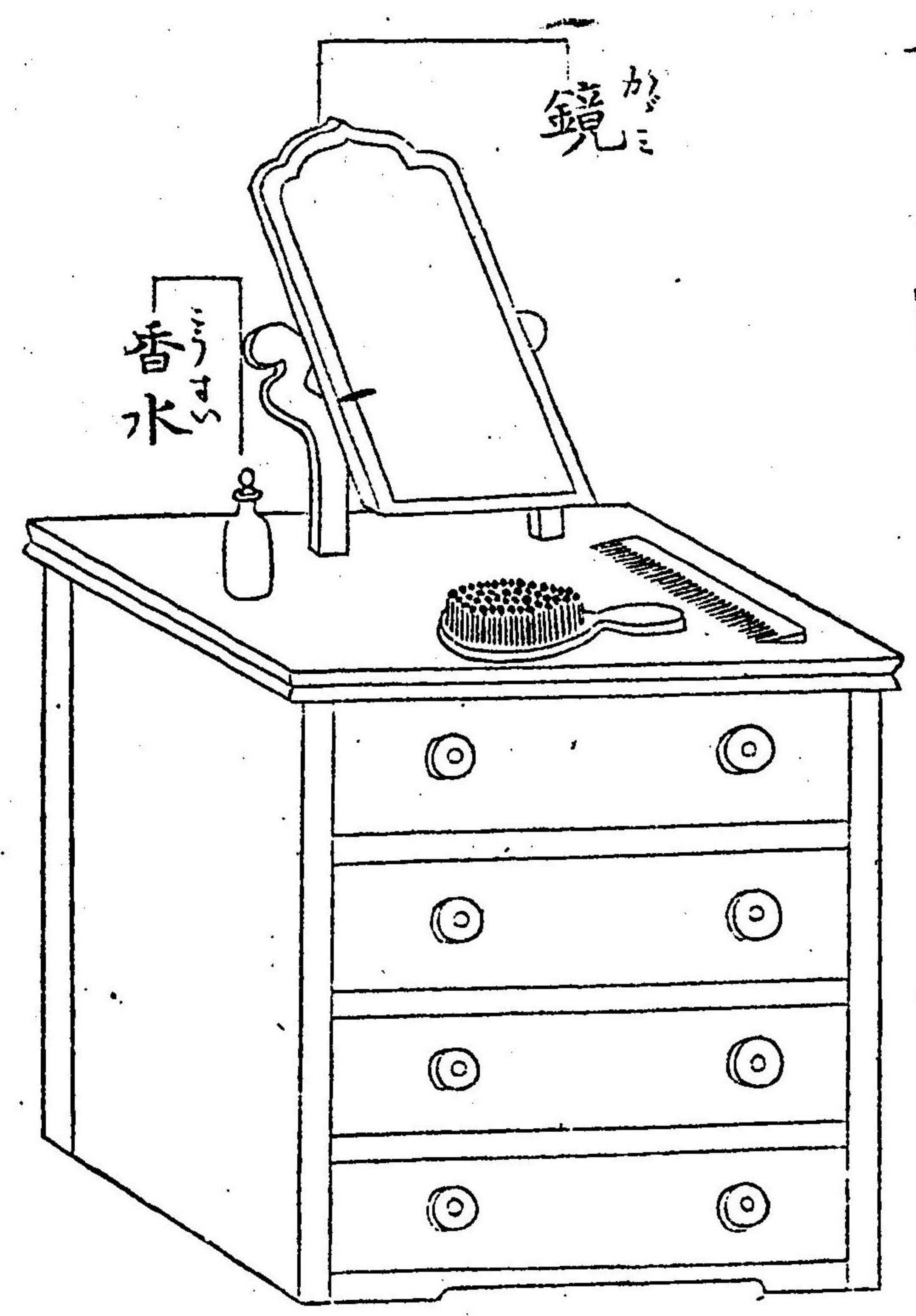
但しまだ是より廣きもあり狭きもあり又一
間のやもありてホテルよ依て一様ならま

表てと裏よ左右二ッ宛の出入口あり横五六尺縦
一丈余りのガラス戸なり又二間の中仕切の壁
にも左右二ッ宛出入口あり真中よ六尺をかりの
中窓あり儲表の間には左右の兩隅に三尺不
の高机と椅子一ッ宛を設く一ッの机には大鏡を据
へ形見は備ふ之れよ我持參もる櫛毛櫛香水等
を置へ一又一ッの机にハ手水鉢を据へ其邊よ小
さきコップとカラスの徳利一ッつ、あり是は吞
水又ハ口洗水也又其脇よ蓋小皿二ッあり一ッハシ
ヤボン入り一ッハ齒磨の楊枝人なり此机ハ二段

手水屋の圖



簞笥の圖

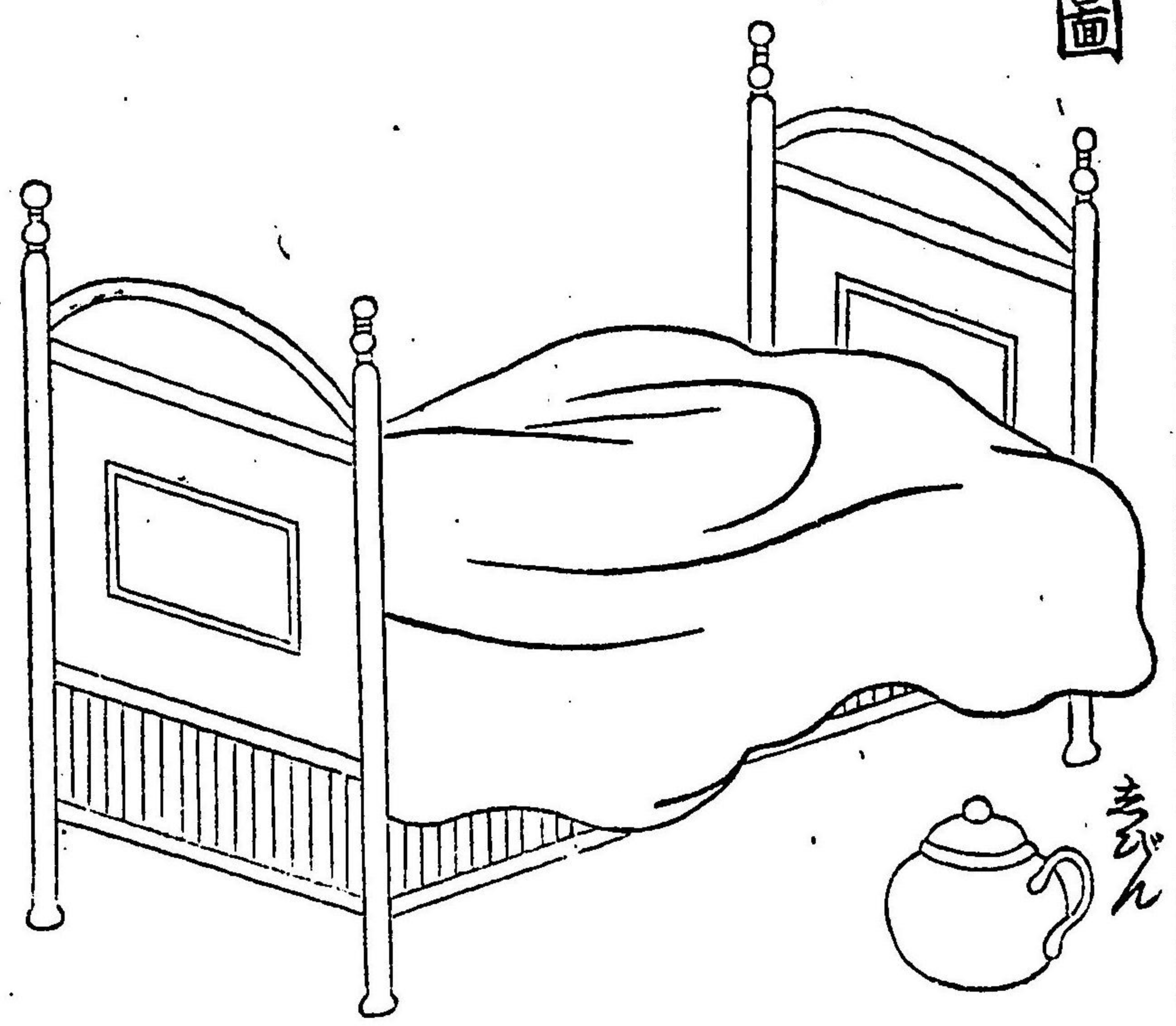


よ拵へ下段ハ大水差と水こ不あり此水よて
面や手を洗らひ汚水ハ其水こ不よ捨るなり
此水ハ毎朝ホーイ取替に來り其節机を掃除も
又西洋の風俗と一て食前食後は勿論外出して
歸る節よ日よ幾度となく面と手とを洗らハ鏡
よ向ひて髪を梳るなり故よ水盡れハホーイよ
申付け替さすべー又机の邊よ手拭かけあり手
拭ニッ宛拭てあり毎日一ツツ、洗濯志て淨き手拭
と替るなり都て此手拭とシヤボンハホテルよ
り仕出もなり揚枝と齒磨とハ自分より仕出す

へー又片方の壁ぎてよ横三尺縦六尺てかりの
線臺あり晝寐又日中横よなりて書見などをも
るよ供も坐敷の真中に大机を置き上にフラ子
ルの敷物をかけ脇よ椅子三ッはかりあり書き物
又ハ客來の節爰よて對話も又一隅に高さ六尺
幅三尺はかりの簞笥あり簞笥の内を縦よ中仕
切を入れ片輪の中よハ上よ折釘兩横奥三方に
六ッもかりあり西洋服は都て掛るやうよ拵らゆ
る故是よ掛け置き片輪ハ四五段に横仕切あり
是よは疊たる衣類又ハ小道具を入置くなり又

其邊ヘより大なる衣類掛けあり形カタち日本の品と同
 一是アセにハ汗物アセモノ等を掛け置ツなり外輪ソトカワの壁カベの真中
 に口ウ石アタタカにて作りたる間マ温ヌクあり冬分ハ之カより火
 を入れ暖アタタカならしむ次の間カハ寐間カヘルなり縦六尺高
 さ一丈横三尺余り一人寐のベツトヒトツとヒトツ二人
 寐ヒトツの分ハ横五尺位のもの一脚ヒトツあり四柱ヨツノハシ黒又ハ
 青塗アヲヌリよりて金色キンイロの彩色サイシキ模様ヨロあり之ノに紹シウの如き
 蚊帳カヤを施セこし其すそを敷蒲シキフ團ツの下ノは狭ハサむ敷蒲
 團ツハ極キツめて厚アツく二枚はかりも敷シき寐カれハ身カラ躰ダ
 ハ落ヲキ込コム様サマなり故ユに上ウにハ僅ワツかに薄ヒヨクき廣ヒロク反物サシモノを

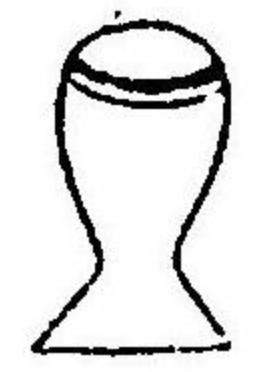
寐臺カシの圖ヅ



着てねるなり枕ハ縦一尺横二尺計りの小蒲團
二重なり孰れも皆純白なる織物にて拵へ少も
汚れ垢附きたるもの無く此間の隅も高さ二
尺計りの箱あり中よシピンを入れ置き夜中て
別よ便所へ行かも小便は是よ致し箱よ入れ臭
氣を塞ぐ様よして置けり是は毎朝ボーイ換る
なり又部屋毎よ子シ金一ッ宛あり用事ある時ハ
是を回轉せも壁の中をく、り彼鐘仔房即ち
ホーイ部屋にある鴨居の番子の邊よ鈴一ッ宛あ
り之に通ト鳴なりホーイは之を見て何番の部

屋の鈴と知り来るなり
浴室よは衣類掛の木釘三ッありこれに衣を掛置
き下に椅子一ッあり是に腰をかけ躰を洗ふ一方
の壁よつきて横三尺縦六尺深さ一尺五寸計り
のロウ石造りの風呂あり上よ螺施あり是を廻
せし水出て又是を戻せも水留る湯ハ下より酌
て擔ひ上るなり
浴湯より歸れハ齒を磨き面を洗ひ鏡よ向ひ髪
を梳つり香水を襟其外へ振りかけ不淨を拂ひ
衣服を着靴を穿ち夜よ至り寐に就きて其なり

よて居る

此時ホーイ茶にて王子ニツとハン二切ツタキレを持來
る凡て茶ハ湯吞トウチ横取手トウテの付きたるものよ入
れ夫れを皿の中スに据へ少々こする、ヨキとも能や
うよしてあり茶の中スにハ燒砂糖ヤキサトウと牛乳メルク四分の
一を加へ王子ハ  やうの瀬戸物セトの上の口へ
縦ホウテウに入れ皿の中スに添へてある包丁ホウテウよて上を少
し切り小ヒサレよて中をすくひ食ふなりハンもま
た皿モに入れ來る別モに煉酪モルトと燒塩ヤキシホ少々有りボウ
トルもハンモに付け塩ハ王子に付けて食ふなり

夫より人來りて應接オウセツするも他へ行きて會同クワイドウも
るも時計トケイを以てす何時ナニトキよ來り何時ナニトキよ歸るとい
て僅かハズても違ふ事チガハなす違ふ時チガハハ断然ダンゼンと其事を
廢ヤメるなり食事ハ日の長短チガイよ大概タイガイ朝食ハ午前九
時なり是を早茶ヒルと云ふ晝食ハ午後一時是を小
食ヒルといふ夜食ハ同トく七時是を大食ヒルと云ふ文
字面シヨウワシヨクのことく朝アシタハ至て少食シヨウワシヨクにして段々ダンダンよ晝夜ヒルヨル
と増て食ふなり

朝の大食ハ大に人身ヒトミよ害ガイあり記臆キオクを減ヘテもと
いへり日本人ハ心を付へり

凡て食事の節ハ二度鐘を鳴らしてこれを報も
譬へも晝食一時なれハ初鐘を十二時三十分
鳴らす是より爲拭りの用事を仕舞ひ心支度を
もるなり一時なれハ第二度の鐘を鳴らも是
より食事堂とて別よ在る處へ行きそるふて食
事もるなり

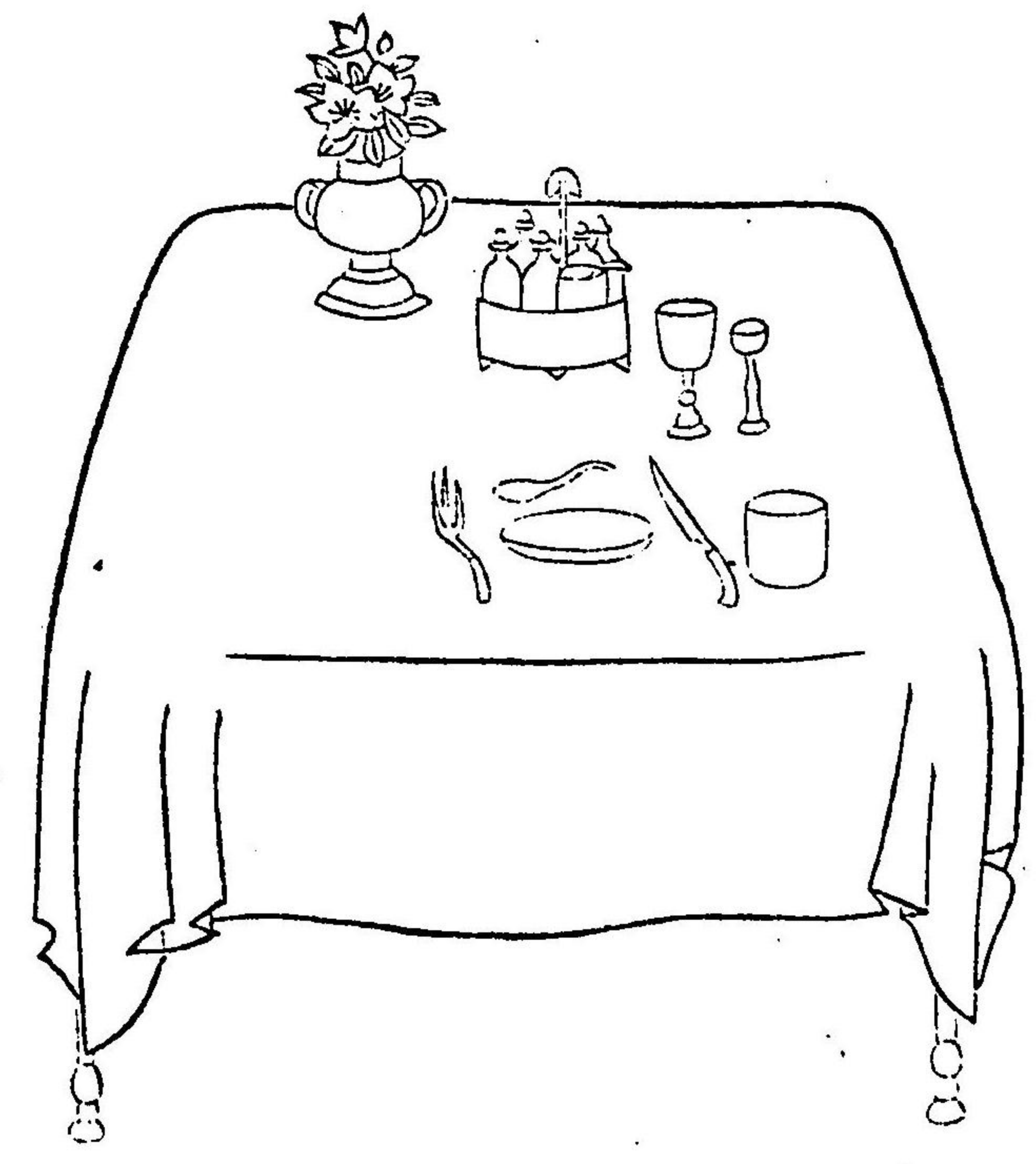
食事堂ハホテルの大小よりて五六百人も一
所よ食もへきあり七八十人の少並ひ食もへき
あり又机も幾數もありて唯二三人一所よ食も
る程の机も數十人並ひ食もるもあり偕こ、

至れハ中央の大机に純白の敷物を掛け真中よ
活花をかざり又鹽胡椒の粉酢油の類を瓶に入
れ前以て出し置くなり各々椅子に就けも一人
毎に机上の左よ肉刺右よ庖丁前に拭巾中よ皿
あり夜食の節スツプ物のを吸ふ時は皿の向ふ
よ大皿を副ふ皿は食物三品なれハ三枚重ね五
品なれも五枚重ね一品喰畢ること以上の皿よ
り一枚つ、ホーイ取除るなり尤もホテルによ
りて皿を重ねす一品づ、代る代る出ももあり
着席すれも拭巾を取て膝まかけ左手に皿をつ

まみ右手より大ヒを持って
 スツフを吸ひ肉類なれ
 て左手に肉刺を持ち肉
 を押へ右手に庖丁を持
 て少し宛切て肉刺を右
 手に持替喰ふ又切りな
 から食ふ時ハ右手の庖
 丁にて切り左手のま、
 肉刺より刺て喰ふなり飯
 類は左手の肉刺よてか



食事臺の圖

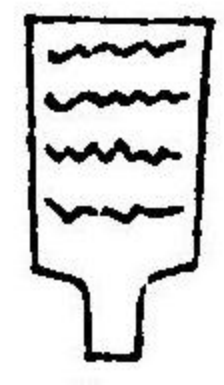


きよせ右手の刺サシもくひ入て食ふ一皿サラクヒワラ食畢れ
 ハ度々皿の中へ匕類を入置へ左もれハホ
 一其汚皿ケカレハ勿論肉刺庖丁ホウチヤウ匕とも下けて皆
 新アラタなるものと取り替來るなり右の拭巾フキンハ膝ヒザへ
 かけ衣類の汚ケカれぬやうもるのみならも肉類
 を喰シヨク一口の邊アタり汚るれも幾度イタドもこれよて拭ふ
 なり
 食物ハ大抵朝三品晝五品夕七品尤も國よより
 てホテルよよりて朝食ハ前よいへるハン王子
 茶のみよて別よ食物ハなきもあり又晝三品夕

五品なるもあり

我日本人などの朝食を飽食ホウシヨクを一馴ナれしもの
 は俄ニワカに王子ハン茶のみよてハ込コまる故其時
 ハ別段に詭アツらへて置へ
 借食物の品ハ何れもハン二切程フタヤレに牛羊鶏小鳥
 豚兔等ブタウサギの煮ニたるか或ハ焼き又ハ塩漬シホツケの類魚揚アサ
 物王子の半熟杯ナマニハナドなり右へ何れも野菜ヤサイ一品宛副ソ
 不飯フヘンにハ鶏牛の骨杯ホウナドを煮出シ其汁シユを和マセて喰ふ
 又我日本のチシヤの如き菜サイへ酢臈スアアラを掛けて生
 よて食せしむスツフの實ミハ麵類メンライハン米大根人

參筭よりて其余ハ菓子三四種あり
都て郵船又ホテルもても食事の座に着て
圖の如く日本の羽根板の如き板へ其節の出來
てある丈けの品物を紙に書記して張付け出す
客人ハ自分自分の嗜む物を申付けて出さしむ頭
と日本の嚴重茶屋にて塗板へ其日の出來合物
をかきて見するか如く唯其違ふ所ハ日本にて
ハ始めも嗜むものを皆一度も申付け共彼でハ
一皿一皿もて食畢る度毎も見せるを好て申付
るなり



食畢れハ茶を出も尤も好くもよりコッヒーを用
ふるもあり茶盞の摘あること又下皿の付くこ
と上も云が如くこれにハ牛乳又ハリキール酒
を加へ焼砂糖を和し銀の小ヒもてかき交ぜ吞
むなり此時水菓子を出も其品は九年母密柑梨
子桃山桃林檎葡萄柿櫻の實芭蕉の實覆盆子其
他數種々ありて數へ盡し難し水菓子も大抵手
指もて喰ふなり其跡もて大きな茶盞も水を
入れ中も摘楊枝を浮して出も楊枝を遣ひ水も
て口を洗ひ拭巾もて是を拭ふなり此水を吞も

のと思ひ間違マダカヒの出来デキる事あり心得置へい
晝と夜との二食タイヂイもて大抵酒を用ひ多くハ葡萄
酒なり是ハ二人ヒトニもて一瓶を飲ノムむなり尤も外も
も種々の好キみも應オウじて何なりとも飲へいホテ
ルハ固ヒキヤクより郵船ユウセンもても賭ハ始マカめの談ガシバンもて常の
通りなれとも酒は其度タビごとく小幣切コハギの札フダを出
もこれナニヤケも其酒何瓶ナニビンと書てボボーイイも渡ワタせも滞留トウリユウ
仕舞ツウも惣勘定ソウカンテイもて金を拂ふなり
食事の時の飲物ノミハ日本もて茶や湯ユなぞ吞クハむと
ころは皆水なり夏分ナツブンはまた是も氷コオリを澤山タクサンも入

れて極冷ゴクヒヤ水スイもして出す尤も右のごとく酒を用
ひれハそれもて水を煎用カキマユルもるなり盃水サカヅキ香カの兩
コツフは前より皆一人も一ツ宛出ツケして机上ツケもあ
るなり
凡て西洋にハ飲食をもちるに音ネを爲ナをも失禮シレイと
して大きも忌イむ也故も食物ハ勿論茶チヤココーヒヒ一
酒スツフを飲ノムにも成丈ナシけ音ネせぬやうに心を用ひ
へい嘗て西洋婦人の其子に教シひるを聞クに曰ナシ汝
豚ブタの物を食ふを見たりや大も音を爲ナも人たる
者の真似マシもべき事も非ヒもど

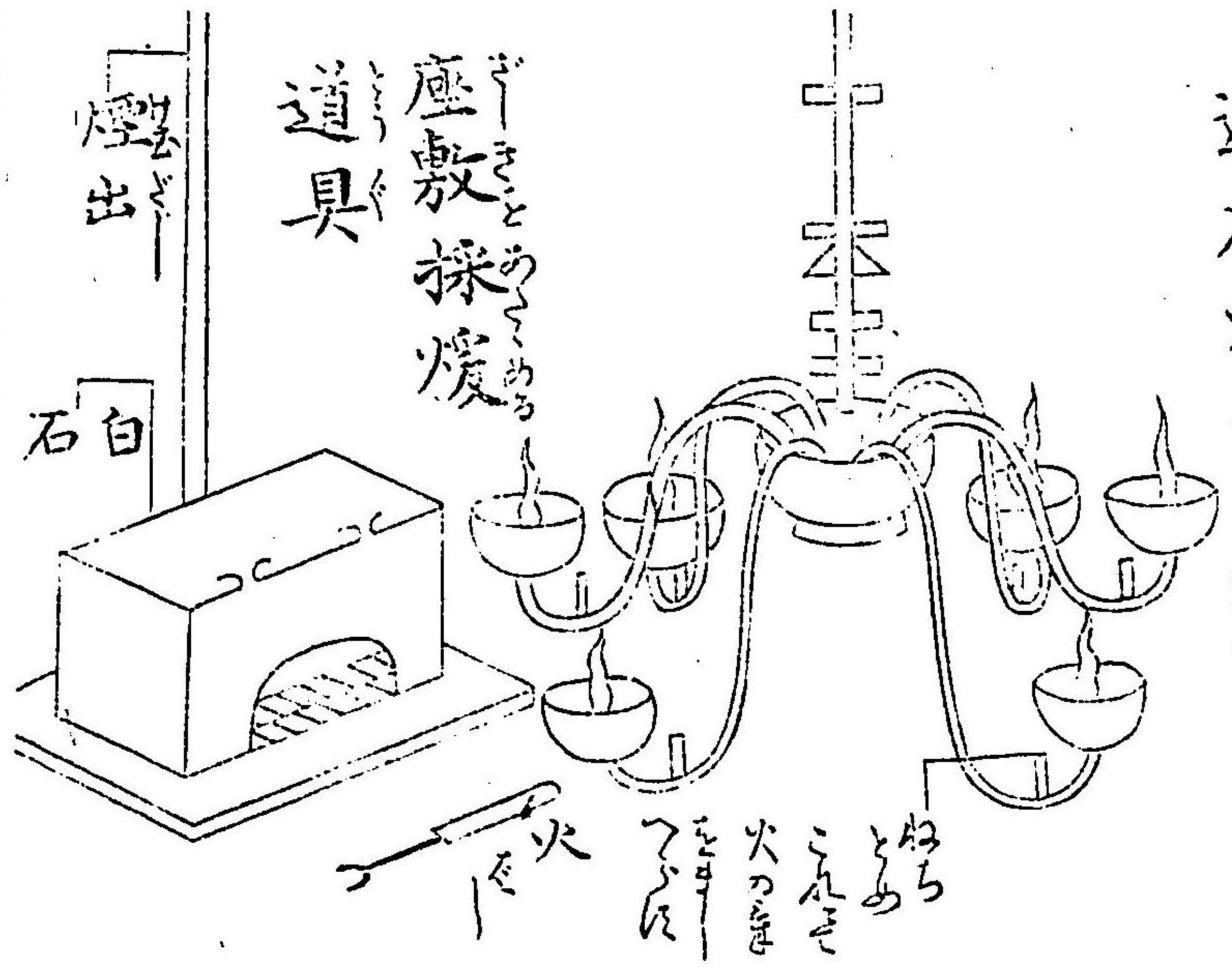
西洋よハ食事時に非されハ白湯サユにても無ト故
よ時ならざれハ決クワして飲食インシヨクせも咽喉ノド渴カフけて水
を呑む容キヤク來れハ酒のみを出も時としては之よ
花形ハナガタの小きハンを添ツへて出も是日本の茶を
出も所トコロなり故よ道路ドウロ又見ミ掛カり店ミセにて食物を賣ウ
者モノ一人もなく飲食の節セウ製セイ甚だ宜ヨシ一日本フキヤウの不行フキヤウ
義ギなる者ハ大オホよ込コる事ホトあり但タ支那日本など
よ限カキりて道上よ食物を賣り立タなから喰ふあり
誠マコトよ見ミ苦クいきこと云はむ方カタなり
飲食ハ体カラダを養ふ爲メなり故よ西洋よハ食事シジもる

間マを一時イチジとす譬ヒへも晝食ヒルメシ一時イチジに始ハジむれハ二時
よ終ワツる緩々ユルユルと談話ハナハしなから食ふなり故に食物
も能ヨく嚙潰カミツツし消化コナレよ一日本人の如く身ミよも藥
にもならぬ早喰ハヤグヒもるもの無ナし

因キナミニ曰イハ日本支那などの風俗フウゾクよ蔬食ソシヨクさへもれ
ハ能ヨきやうに云ふハ誤アヤりなり右ミドリの如く食ハ
体カラダを養ヤシ者モノなれば美食ビシヨクして驕ラゴリになるハ宜ヨシ一か
らされ共成ナり丈ダけ滋味ジミを食クして体カラダを健康スコヤカに
心氣シンキを養ヤシ成ナるべしクスリニナルクヒモノ

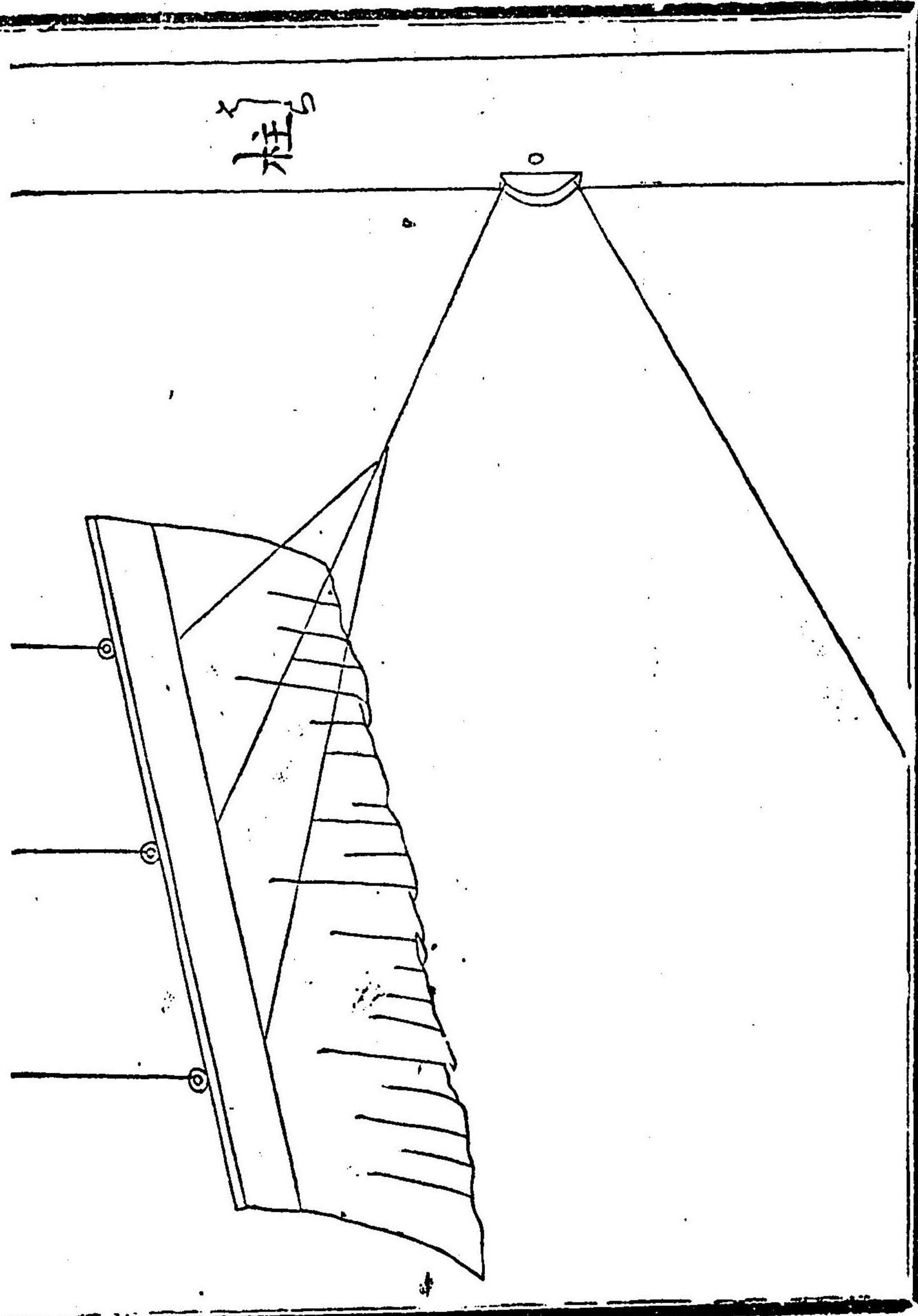
食事終マタる共區マキ々々よ退去ネリツキサルもる事を許ユルさす必カナラらず

逆旅燈火の圖



同道の者ハ一同ニ立
 去ナリ其ヨリ暫時園
 庭ナシヨ運動一然後
 ニ各々部屋ニ歸ル郵
 船にてハ別テ運動を
 第一トス
 食事日暮ニなレハ机
 上ニ燭或ハランプ又
 ハカス燈を照ラシ明
 きこと白晝こと一夏

柱



分ハ天井テンジョウより横一丈四五尺縦三尺はかりの金
巾キンにて製ツクりいひらひらしたるものを下サゲ垂タら
中仕切ナカシキの木キよ糸イトを三條施シこゝ其糸イトの一ヒト條ツスギよな
りたる末ハシラを柱ハシラの轆轤ロクロよ通トワしホイをイて絶ツへ
も之ヒを曳ヒき緩ユルめせしむ故レよ始シ終シ風吹フキ來キり至ツて
涼スズクし鳴呼ナゲ冬フユハ間カヘ暖ナゲあり夏ナツハ風カゼを來キらし實ウチニ快クワイ
樂ラク也ヤ是コト備ヒトよ人々ヒトの智チを用ヨゆるよ在アるのウ勉ヘン勵レイ
せざるべけんやツトメハクム
然シカして最後サイゴ寐シよ就ツクて茲ココよ及ツキて始シて服フクを解トクき靴クツ
を脱ヌぎしなり

因ナリよ曰イハ西洋セウヤウは射カサ中ナカは勿論モロシ手足テアレの端々ハシよ至ツキる
迄マデ出デして人目ヒトメよ觸フる、を失禮シツレイとシ故レに筒袖ツツソデ
股引モモヒキの末ハシラを少シよても引ヒキ上げ手足テアレの首クビを顯アラ
ハハしても大オホ怒イカるなり夏ナツ分ワケなど暑アツよ堪タ兼カね
日本人ニッポンジンハ覺オぼへも知らシらズ襖フスマ衣エして汗アセを拭フクふ事
あり心ココロを用ヨゆへい

熊谷縣下高崎驛

誠之堂

